

令和6年12月1日

宮崎大学

No.36,37

発行
宮崎大学工学部
化学会

工学部化学会会報

〒889-2192 宮崎市学園
木花台西1丁目1番地
TEL(0985)58-7316(宮武)
FAX(0985)58-7323



キャンパス内に設置されたソーラーカーポート



キャンパス内に設置されたソーラーカーポート

CONTENTS

- ごあいさつ・・・・・・・・・・2
- 本部から・・・・・・・・・・2
- 支部だより・・・・・・・・・・6
- 学科・プログラムだより・・・・・・10
- 報告・年次別所感・・・・・・20
- 新みやざきはいま・・・・・・23

ごあいさつ



会長

日高宗徳

(59 年卒)

大変お世話になります。会長の日高宗徳と申します。会報の寄稿としてご挨拶いたします。この度 2023 年と 2024 年の会報が同時発行になりました。誠に申し訳ありません。毎年会報を楽しみにされておられる会員の皆様には心よりお詫び申し上げます。ここ約 4 年に渡り皆さんコロナ禍の環境変化にご心労された事と思います。昨年春から新型コロナが 5 類感染症へ移行し人との交流が徐々にコロナ以前へ戻りつつあるようです。昨年は宮崎大学の OB 会であるホームカミングディも 4 年ぶりに開催され県内外から多くの方が参加されました。また工学部同窓会の各支部会も同じく各地で開催されました。徐々にではありますが皆さんにおかれましては飲み会を再開され復活の年になってきたのではないのでしょうか。

本年は生活環境も経済優先の社会へ変わり、年明け早々に日経平均株価はバブル以降最高値となり経済実態と掛け離れたスタートとなり海外の投資家から背中を押されている様な状況となりました。心理的には少しずつコロナ禍前の社会へ戻って

来るのではないかと期待しています。

2024 年は宮崎大学の節目の年で教育学部 140 周年、農学部 100 周年、工学部 80 周年、医学部 50 周年の年とないっている様です。宮崎大学の facebook には昔の大学写真が掲載されています。また、宮崎大学化学会の facebook にも先輩方から投稿頂いた写真など掲載を進めていますのでプライベートグループメンバーに是非参加し学生時代の思い出などを投稿して頂きたいと思います。

化学会の活動は昨年よりリモートで理事会のみとなりました。各支部もコロナ禍を懸念し開催を控えていました。恒例の懇親会で年代を超えた多くの方とお話をさせて頂き、社会状況は元より、生きる活力や人生のアドバイスなどを相互扶助する場を設ける事が出来ない事はとても残念でした。今年は各支部総会を対面で行い懇親会を開催するとの事です。ですので楽しみにしています。また、全体の化学会の懇親会を宮崎で是非開催したいと思います。学生時代を過ごされ、久しぶりに宮崎へ来られては如何でしょうか。

最後に化学会の繋がりはいくらでも継続して行きますので皆様のご協力と御援助を本年もよろしくお願い申し上げます。

本 部 か ら

理 事 会 報 告

化学会会報をお届けするのが非常に遅くなり、また No.36 と 37 号の合併号となりましたこと誠に申し訳ありません。

さて、令和 4 年度の理事会は新型コロナの感染拡大が収束していないなか、十分なコロナ対策を行い令和 3 年度と同様宮崎大学まちなか・キャンパスで今年も Zoom を用いた遠隔参加も可能として、令和 4 年 12 月 10 日（土）に開催されました。会の開催に先立ち日高新会長以下役員 10 名（その内 Zoom による遠隔参加 2 名を含む）の参加と 17 名分の委任状により、本会が成立することは報告された後、（1）令和 3 年度事業報告、（2）令和 3 年度会計報告、（2）令和 3 年度会計報告、（3）令和 4 年度事業計画（案）と会

令和 3 年度会計報告、（3）令和 4 年度事業計画（案）と会報 No.36 の企画、（4）令和 4 年度予算、（5）役員の改選について、（6）その他、について審議されました。

令和 3 年度の本部事業は新型コロナ感染拡大のため、本部理事会(2021/12/11)を開催したのみで、その他の化学会の行事、および工学部同窓会と同窓会連合会の行事は全て中止であったことが報告されました。会報 No.35 号は、No.34 号に引き続きインターネット入稿による格安の印刷会社を利用して格安で印刷すること、会報の発送を全員に行わずに 5 年以内に会費納入の実績があった会員、60 歳以上の会員および卒業後 5 年以内の会員に限定して郵送することが報告されました。会計報告では、令和 3 年度会計報告がなされ、承認されました。さらに、令和 4 年度事業計画（案）と会報 No.36 の編集案の説明があ

った後、書面会議や HP の更新などについて意見交換がなされました。

次に、令和 5 年度の理事会は、新型コロナ発生前に戻りつつあるなか開催されました第 10 回宮崎大学卒業生の集い「ホームカミングデイ」と同日の令和 5 年 11 月 11 日（土）に宮崎大学工学部大会議室で開催されました。会の開催に先立ち日高会長以下役員 15 名の参加と 12 名分の委任状により、本会が成立することが報告された後、(1)令和 4 年度事業報告、(2) 令和 4 年度会計報告、(3)令和 5 年度事業計画（案）、(4)令和 5 年度予算、(5) 役員の改選について、(6) その他、について審議されました。

令和 4 年度の本部事業は本部理事会(2022/12/10)が開催され、工学部同窓会の行事として工学部同窓会卒業・修了祝賀会への日高会長の出席、工学部同窓会主催県内企業 OB・OG 交流会の開催(2022/12/2)が報告されました。会報 No.36 号は諸事情により発行できておらず、No.36 と 37 号の合併号で発行することが了承されました。会計報告では、令和 4 年度では会報が発行されていないことから会費収入が減り支出はなかったことが報告され、承認されました。令和 5 年度事業計画（案）では既に工学部同窓会関連の行事が開催されたことが報告されました。さらに、今後の化学会の活動として、化学会会員に向けた情報発信の場を設け卒業生が SNS を使い気軽に参照参加する事を目的とし、会えない方との WEB を介した懇親や同窓会を気軽にできる環境を提供していくこと、工学部の創立 80 年の記念事業として化学会大同窓会を企画し開催することが日高会長より提案がされました。役員改選では、昭和 62 年

卒業の原口章司氏の副会長への就任、平成 30 年卒業の福島拓己氏の常任理事への就任が事務局から提案され、承認されました。また、福岡支部長の交代により、平成 6 年卒業の牟田惣彦新支部長が新たに理事に加わったことが報告されました。長年福岡支部長としてご尽力いただきました昭和 55 年卒業の外園明氏に感謝を申し上げます。

以上が令和 4 年度および令和 5 年度理事会報告となりますが、本来なら理事長である塩盛弘一郎先生が寄稿されるのですが、塩盛先生が令和 6 年 7 月 9 日にご逝去されたため、今回は事務局長の宮武が代筆させていただきました。塩盛先生におかれましては、長い間化学会理事長としてご尽力いただき化学会を支えてくださいました。心よりご冥福をお祈りいたします。

化学会のホームページ(<http://www.web-dousoukai.com/kagakukai/>)および工学部同窓会の名簿システムの登録および活用をお願いいたします。各種行事の日程確認、住所情報の更新、会費納入状況、会員相互の連絡などが行えます。郵便、電話、FAX、電子メールなどによる住所変更も受け付けております。会員名簿のより一層の整備にご協力をお願いいたします。登録方法が分からない場合は、工学部同窓会事務局または化学会事務局にご連絡ください。また、Facebook に化学会会員の情報交換の場として、宮崎大学化学会のプライベート・グループを開いたしました。Facebook で、「宮崎大学化学会」でグループを検索するか、URL(<https://www.facebook.com/groups/329041939877936/>)に直接アクセスして参加の登録をお願い致します。



宮崎大学工学部化学会(本部) 令和 3 年度会計報告

令和 3 年 4 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日

収入の部		支出の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年繰越	297,033	No.34&35会報発行	154,081
本部会費	331,000	会議費	0
雑収入	0	事務費他	2,126
		支出合計	156,207
		翌年度繰越	471,826
合 計	628,033	合 計	628,033

宮崎大学工学部化学会(本部) 令和 4 年度会計報告

令和 4 年 4 月 1 日～令和 5 年 3 月 31 日

収入の部		支出の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年繰越	471,826	No.36会報発行	0
本部会費	53,000	会議費	0
雑収入	0	事務費他	0
		支出合計	0
		翌年度繰越	524,826
合 計	524,826	合 計	524,826

第1条 本会は、宮崎大学工学部化学会と称し、本部を宮崎大学工学部内に置く。また必要に応じ、支部を置くことができる。

第2条 本会は、会員相互の親睦をはかり、会員ならびに宮崎大学工学部環境応用化学科の発展を期するを目的とする。

第3条 本会は、次の会員をもって組織する。

1. 正会員

宮崎工業専門学校化学工業科卒業生

宮崎大学工学部

工業化学科卒業生

物質工学科応用化学コース卒業生

物質環境化学科卒業生

環境応用化学科卒業生

宮崎大学大学院工学研究科

工業化学専攻修了者

物質工学専攻応用化学系修了者

物質環境化学専攻修了者

工学専攻環境系コース応用化学分野修了者

物質エネルギー工学専攻応用化学系修了者

宮崎大学大学院農学工学総合研究科

化学関係専攻・コース修了者

2. 学生会員

宮崎大学工学部

環境応用化学科学生

宮崎大学大学院工学研究科

工学専攻環境系コース応用化学分野学生

3. 特別会員

宮崎大学工学部工業化学科、物質工学科

応用化学コース、物質環境化学科、

環境応用化学科関係教職員

第4条 本会本部に次の役員を置く。

1. 会 長（1名）
2. 副会長（5名）
3. 理事長（1名）
4. 事務局長（1名）
5. 常任理事（30名以上）
6. 理 事（各支部代表者）
7. 会 計（1名）
8. 監 査（2名）
9. 顧 問（若干名）

第5条 役員は、次の方法により定める。

1. 会長、副会長は、会員の推薦により理事会で承認する。
2. 常任理事は、会員の推薦により、会長が委嘱する。
3. 理事は、各支部より選出された支部長とする。

4. 理事長および事務局長は、常任理事および理事の互選とする。

5. 会計および監査は、会長が委嘱する。

第6条 役員の職務は次のように定める。

1. 会長は、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれに代わる。
2. 理事長は、会務を執行する。
3. 事務局長は本会の事務を分掌する。
4. 常任理事は、理事長を補佐し、会務を分掌する。
5. 理事は支部を代表して本部との連絡にあたる。
6. 会計は、本会の会計を執行し、監査は本会会計を監査する。

第7条 理事会、常任理事会の運営については、次のように定める。

1. 理事会は、会長が招集し、会務を協議する。
2. 理事会は会長、副会長、理事長、事務局長、常任理事、理事、会計及び監査をもって構成する。
3. 理事会は、委任状を含めて構成員の過半数で成立し、議決は、出席者の過半数の同意を必要とする。
4. 理事会は、年1回以上開催するものとする。
5. 常任理事会は必要に応じて理事長が招集、開催し、理事会の決定に従い、通常の会務を執行する。
6. 常任理事会は理事長、事務局長および常任理事をもって構成する。

第8条 役員の任期は1年とし、再選は妨げない。

第9条 支部長は、支部における事業の概要および会員の移動等について、毎年4月末日までに報告するものとする。

第10条 本会の運営費は、正会員会費（年額一口1,000円以上）と有志の寄付をもって充当する。

第11条 本会の会計年度は4月1日より始まり、翌年の3月31日で終わるものとする。

第12条 化学会会員名簿は、必要に応じて発刊する。

第13条 本会の会則は、理事会において行うが、出席者の過半数の同意を必要とする。

付 則

本会則は、昭和56年5月30日から実施する。

平成元年7月22日一部改正。

平成2年7月14日一部改正。

平成11年6月26日一部改正。

平成22年6月12日一部改正。

平成28年6月25日一部改正。

平成30年7月7日一部改

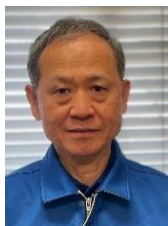
宮崎大学化学会役員名簿

2024.3.1

	役 職	氏 名	卒業年		役 職	氏 名	卒業年	
本部	会 長	日高 宗徳	59	宮崎支部	支部長	黒木 幸英	45	
	副会長	原田 繁利	38		理 事	原田 繁利	38	
	〃	佐藤 松男	41		〃	湯浅 直克	43	
	〃	井上 利行	46		〃	田村 孝	49	
	〃	原口 章司	62		〃	日高 宗徳	59	
	〃	清山 史朗	H4		〃	山下 敏明	60	
	理事長	塩盛 弘一郎	63		〃	三島 幸一郎	62	
	事務局長	宮武 宗利	H5		〃	川越 義則	H4	
	常任理事	福島 勝也	35		〃	宮武 宗利	H5	
	〃	石塚 哲也	36		〃	有馬 明美	H9	
	〃	河野 恵宣	38		〃	岩熊 美奈子	H11	
	〃	前田 武	39		〃	廣澤 直也	H16	
	〃	満永 利夫	48		〃	松本 朋子	H17	
	〃	明石 保雄	53		〃	土井良 俊輔	H19	
	〃	堤 信夫	61		〃	大 榮 薫	H26	
	〃	三島 幸一郎	62		会 計	金丸 慎太郎	H19	
	〃	河野 豊	H1		監 査	清山 史朗	H4	
	〃	後藤 健児	H1		〃	鶴田 哲也	H11	
	〃	二見 宗英	H1		事務局長	菅本 和寛	H3	
	〃	菅本 和寛	H3					
	〃	猪股 康久	H4	東京支部	支部長	田原 修二	58	
	〃	小林 吾一	H5		副支部長	池田 博之	55	
	〃	戸次 太道	H7		副支部長	中村 年秀	H16	
	〃	梅元 大輔	H8		常任理事	吉丸 昌吾	H20	
	〃	坂元 登	H8		〃	飯田 明日香	H21	
	〃	亀田 幸治	H9		理 事	秋吉 孝則	32	
	〃	小玉 誠	H10					
	〃	岩熊 美奈子	H11					
	〃	長友 秀峰	H11					
	〃	越智 洋	H12		名古屋支部	支部長	原 明男	46
〃	吉山 武伸	H12	副支部長			大杉 収	46	
〃	石橋 奈穂子	H12	幹事	菊 健		40		
〃	古市 佳代	H13	〃	上田 和生		43		
〃	津波 伸一郎	H14	〃	高松 昇司		63		
〃	甲斐 康平	H15	〃	鈴木 博統		H7		
〃	廣澤 直也	H16	〃	寺尾 匡史		H17		
〃	松本 朋子	H17						
〃	江間 智	H17	関西支部	支部長	正明 耕一	H5		
〃	金丸 慎太郎	H19		幹事	小宮 広志	45		
〃	荒木 志織	H21		〃	山元 賢二	57		
〃	平野 誠一朗	H28		〃	塚崎 孝規	H19		
〃	福島 拓己	H30		〃	池田 百合子	H21		
〃	田原 修二	58		監事	田幡 正裕	H1		
理事(東京)	原 明男	46	福岡支部	支部長	牟田 惣彦	H6		
〃(名古屋)	正明 耕一	H5		幹事	外園 令明	55		
〃(関西)	牟田 惣彦	H6		〃	小柳 直之	H2		
〃(宮崎)	黒木 幸英	45		〃	米倉 誠	H9		
会 計	稲田 飛鳥	H24		〃	中村 一生	H10		
監 査	山下 敏明	60						
〃	真 隆志	H4						
顧 問	日高 兵馬	22						
	三重野 彰敏	47						

支部だより

東京支部



支部長

田原修二

(58 年卒)

化学会の皆様、如何お過ごしでしょうか？

今年は、元日早々能登半島で大地震、日航機と海保機の衝突事故と痛ましい災害、事故が発生し、多くの方々が犠牲になりました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると同時に、能登半島地震における災害からの早期復旧復興を祈念しております。

日本経済はというと、米国の利上げと共に大幅な円安となり、なかなか元に戻る気配が無く続いています。海外でハンバーガーを食べると、1個2,000円以上という驚きの値段。またとうとうGDPはドイツに抜かれてしまいました。見かけですけどね。ただ、COVID-19（コロナ）には苦しめられましたが、ようやく収束、我々の生活も常態に戻ってきたことは、様々なデータから見えてきており、悲観ばかりしていないで、前を向いて進んでいきたいものです。

さて、関東支部の活動は、例年（コロナで中止の期間は除いて）同窓会がビッグイベントで、3月からの準備で始まり、6月の当日まで幹事の皆さんで行います。また、戴いた寄付金を元手に、連絡先がわかっている方々へは年賀状も出させて戴きました。今時、という感じもあり、今後については相談して決めていきたいと考えています。

さて、ビッグイベントの関東工学部同窓会は、昨年は、Σ会（旧応用物理学科）が主

幹事で開催され、まだコロナ明けの微妙な時期であり、参加者の人数にやや不安なところもありましたが、いやいや120名を超える参加者。本部からも会長を始め、大勢の方に参加して戴き、大盛況裡に終わりました。残念ながら化学会からの参加者は、例年に比べ少なかったのですが、参加して戴いた皆さんには楽しんで戴けたのかな、と思っています。

今年は、化学会が主幹事で6月15日（土）に開催します。先生方にも多くご参加戴き、できればこれを機会に先生に会いに来て、昔話ができる場になればいいかなと思っています。化学会の場合は、二次会は化学会単独で行います。全学科100名以上いる中には行きたくない方もいらっしゃると思います。そういう方は二次会からでもwelcomeです。特に卒業年次の若い方は、一度来てみては如何でしょうか？

コロナ明けで、人手不足というニュースが飛び交っていますが、実際に企業から見ると多くの人材を必要としています。つまり売り手市場です。学生の皆さんは、どんどん自分をアピールし、希望の会社を掴んでください。

最後になりますが、皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。また、皆さんからのご意見、アドバイス等もお待ちしております。



名古屋支部



支部長

原明男

(46 年卒)

今年は、年明けから能登半島地震、羽田空港での飛行機事故と自然災害、事故と大きな災害で始まりました。能登半島地震のその後の復旧状況を見ますと、少しずつ改善の方向にあります、生活の要であるインフラの回復にまだまだ時間がかかりそうです。一方、いつ起きても不思議ではないと言われています東南海地震は、避難訓練、耐震化、防潮堤と進みつつありますが、今の準備、対策でいいのだろうかと改めて熟慮するしだいです。1 日も早く被災者の皆様が復旧されることを願うしだいです。ところでここ 3 年間、コロナ禍ために中断していました化学会名古屋支部会を 4 年ぶりに開催することになりました。取り敢えず、コロナ禍前に参加してくれた会員に連絡したところ皆さん、快く参加の承諾を得ましたので、令和 5 年 9 月 30 日、いつもの名古屋駅の JR セントラルタワー「嘉鮮」で懇親会を開催しました。今回は、全員で 7 名の参加でした。懇親会は、連絡事項の終わりしだい、皆様の近況報告に始まり、ここ 3 年間をどう過ごしたかそれぞれ語られ、何とか新型コロナを乗り切ったとの事でした。最後は、どうしてもここ数年、参加者のメンバーが固定された事、少しでも参加者を増やすには、どうしたらいいのかとの話になり、化学会本部と連絡をとり、最新版の東海地区の名簿を戴いたらとの提案もありました。化学会名古屋支部の会員の皆様の名古屋支部会への参加を期待しております。



また、今年は、中部工学会も 4 年ぶりに開催しました。今回は、機友会の持ち回りという事で、10 月 22 日に浜松市の浜松駅前の「イタヤマチ パル」というところで開催されました。私(磐田市在住)のとなりの浜松市での開催だったので気楽に参加させて戴きました。

今回、会費については、工学部本部からの支援もあり、令和の卒業生は、無料。平成 26 年以降は、会費 1000 円と出来るだけ参加人数を増やすべく配慮がありました。化学会の名古屋支部は、取り敢えず、参加しそうな人に連絡しましたが、3 名の参加となりました。特に、令和の卒業生がいないか、化学会本部に問い合わせしたところ、東海地区には、卒業生はいないとの返事があり、最近の「工学部化学会会誌」を見ても、地元志向が強いかと思いました。工学部部会は、最初各学科同窓会支部総会があり、大学本部より湯井教授を迎え、最近の工学部の現状を話して貰いました。それから、中部工学会部会総会は、井上康雄会長の挨拶から始まり、懇親会となりました。最後に、閉会の辞を化学会名古屋支部に依頼され、無事に中部工学会部会並びに懇親会が終了したことを述べ閉会となりました。

また、余談ではありますが、昨年は大河ドラマ「どうする家康」が放映され、ここ東海地区は、家康ブームでした。家康にちなみ、講演会、パネル討論会が開催され、浜松では、主役の松本 潤さんを招いての市内パレードなどがあり、たいへん賑わいました。磐田市の家康にちなむ遺跡、記念碑としては、三方ヶ原戦いの前哨戦である「一言坂の戦い」、「酒井の太鼓」及び家康御殿跡等あります。今回、改めて歴史の遺跡を見直したしだいです。



支部だより 福岡支部



支部長

牟田惣彦

(H6 年卒)

この度福岡支部長を引き継ぐことになりました、平成 6 年卒の牟田惣彦です。諸先輩方より、次期福岡支部長への推薦をいただき、幹事の皆さんより後押しをいただきお受けすることといたしました。

さて、少し自己紹介をさせていただきます。昭和 44 年福岡県小郡市に生まれました。小郡はなじみがないと思いますが、久留米市（ブリヂストン生誕の地、松田聖子、チェッカーズといった有名人の出身地）の隣の田舎町でございます。学生時代はバスケットボールに明け暮れ、自慢は体力のみでありました。祖母が高千穂出身ということもあり、宮崎には非常に親しみを感じており、高校卒業後の進路では自然と宮崎大学を志望したのを覚えております。

平成 2 年入学時、宮崎大学は清武移転の 3 年目であり、入学初日、真新しい校舎と新しい仲間と地元出身の子の宮崎弁が懐かしい思い出です。学生生活は友達や先輩・後輩に恵まれ、非常に楽しいものでした。特に、体育祭や文化祭などのイベントではしゃしゃり出ていたような記憶があります(笑)。研究室は有機 2 研で林先生のご指導をいただきました。研究は実験の結果がデータで実証できることに楽しさを感じ液体クロマトグラフィー（HPLC）で分析をおこなったことが思い出であります。卒業後は三島光産株式会社に入社しました。弊社は日がある会社です。社会人生活の始まりは化学の知識を活かし、

製鉄向け連続鋳造鋳型の生産技術に携わり電気めっきの技術者でありました。今年で社会人生活 30 年となり、会社では永年勤続表彰をいただくようになりました。キャリアを重ね、ここ数年は管理側の立場となり、現在では総務部にて庶務や広報に携わっております。弊社では化学卒が活躍できる職場が多いこともあり、宮崎大学卒の先輩・後輩が多数在籍しております。

宮崎大学を訪問する機会がありますが、学生当時にお世話になった塩盛先生、湯井先生、宮武先生(先輩)がご活躍されていることは大変うれしく感じております。また、菅本先生など工学部同窓会・化学会を盛り上げていただき感謝しております。

昨年の理事会では、福岡支部と北九州支部をまとめて福岡支部とすることをご了承いただきました。なかなか支部同窓会の活性化は難しいところがございますが、工学部同窓会と連携し、化学会の親睦も深めてまいりたいと思っております。

では、今後ますますの宮崎大学の化学系学科の発展と化学会会員各位のご発展とご健勝を祈念いたします。

最後になりましたが、長年にわたり化学会を支えていただきました三重野会長、福岡支部を支えていただきました外園支部長に感謝申し上げます。引き続きご指導をお願いいたします。



宮崎支部



支部長

黒木幸英

(45 年卒)

化学会の会員の皆様、如何がお過ごしでしょうか。国内を 3 年余震撼させたコロナ感染リスクもワクチン接種、治療薬の開発・普及などにより令和 5 年 5 月 8 日から緩和され、徐々にコロナ発生前の社会経済に戻りつつある昨今です。しかし、この間、マスク着用、葬祭関係の簡素化や集合施設出入口での手指消毒等々が習慣となり、私たち社会生活様式が変化しています。

さて、令和 6 年は正月の能登震災、航空機事故の大災害に始まり、政治資金、国家間紛争、高度情報化に伴う各種被害等が発生しており、不確定要素が多い大変厳しい局面に遭遇しています。

暗い話が多い中、明るい話もあります。令和 5 年は侍ジャパンが WBC 優勝、米大リーグで大谷選手が 2 度目の MVP に、将棋では藤井聡太棋士が史上初の 8 冠の全冠制覇を達成しました。また、宮崎では昨年 10 月末に「宮崎県人会世界大会」、今年 2 月には日本のプロ野球パリーグで 2 連覇したオリックスが宮崎市清武町の「SOKKEN スタジアム」で 10 年目のキャンプや

プロ野球及びサッカーチームのキャンプ等が開催される等、スポーツランド宮崎として国内外から注目を集めています。

ここで、化学会宮崎支部の報告をさせていただきます。令和 5 年度もコロナ禍のために支部理事会・総会が開催できませんでした。しかし、7 月 1 日は工学部同窓会が、11 月 11 日(土)は宮崎大学卒業生の集い「ホームカミングデイ」が開催され交流を深めることが出来ました。その日の午後には大学構内で化学会本部理事会が開催され、事務局から事業報告・事業計画の報告・説明があり、新規事業として会員相互の交流を促進していくための情報通信構築事業、化学会会報は合併号として令和 6 年 3 月発行に向けて取り組んでいくことの提案が承認されました。また、役員改選の中で、ホームページ、オンライン、ソーシャルネットワークに詳しい IT 企業勤務経験者の原口章司(S62 年卒)が新副会長に選任されました。化学会も新たな展開による発展が期待されます。

最後になりましたが、令和 2 年度から支部理事会・総会が開催されていません。地元宮崎支部としましても、大学、工学部及び化学会の充実発展のために開催に向けて会員の方々や事務局と情報を共有してまいりたいと思いますので、よろしくお願いします。



学科・プログラム近況報告

令和5年度プログラム長 湯井 敏文

令和5年度は、筆者にとって公私にわたる節目の年となったようです。本年度をもって旧物質環境化学科の学生は卒業年度となり、改組後の応用物質化学プログラム3年生が研究室に配属されます。学生の進学・就職状況も相変わらず好調で、2月時点における大学院修了予定者26名の就職率は100%、卒業予定者60名のうち本大学大学院進学が31名、他大学大学院進学が6名、就職21名、未定が2名となっています。本年度の特徴として、かつて就職難の頃、大学院修了生でさえも行政職、警察・消防等に就職した事例がありましたが、今回、学部卒業生および大学院修了生の両方において公務員関係の就職は皆無です。就職先企業についても、例年、IT・半導体関連業種が目立っていましたが、今年度の大学院修了生は多様な業種で採用され、好ましい傾向と思えます。

本年度は、筆者にとっても退職の年となります。残りの1、2年は後始末を理由にのんびりと過ごすつもりでいましたが、諸事情により3年連続で学科長、プログラム長を仰せつかったうえ、最終年度に至るまで複数の教員人事を担当しました。今年度の機能強化支援事業（略称）を財源とする助教人事に対応

するにあたって、適任者探しに奔走し、菌類・木質科学を専門とする特別助教1名を生物環境化学分野の教員として採用するまで漕ぎつけました。その結果、一昨年の宇都准教授、昨年の井澤教授に続く生物関連分野における教員採用となります。かつては微生物工学一辺倒であった同分野も、生物化学・分子生物学、物理化学、有機化学、高分子科学と多様な専門分野を背景とする教員で組織され、将来の研究情勢の変化に対して柔軟に対応できる体制になったと思います。

令和5年度のニュースとして、宇都卓也先生が高分子学会「2022年度高分子研究奨励賞」を受賞されました。大型研究費の新規獲得もあり、井澤先生がNEDO「官民による若手研究者発掘支援事業」、大島先生が科学研究費基盤研究Bに採択されました。その他の先生方も、NEDO、CREST、基盤研究C、若手研究、および各種財団補助金を、新規・継続課題として獲得されています。この4月に着任する新任の特別助教に加え、環境・エネルギー工学センターの解散によって、同月から奥山先生が当プログラムへの配置換えとなります。両名の先生方におかれてはプログラムの教育・運営でのご活躍を期待する所存です。

教 員 名 簿

（令和6年3月1日現在）

組織	教授	准教授	助教
応 用 物 質 化 学 プ ロ グ ラ ム	井 澤 浩 則 大 島 達 也 酒 井 剛 塩 盛 弘 一 白 上 努 湯 井 敏 文	宇 都 卓 也 菅 本 和 寛 鍋 谷 悠 廣 瀬 遵 松 永 直 樹 松 根 英 樹 松 本 樹 仁	稲 田 飛 鳥 宮 武 宗 利
工 学 基 礎 教 育 セ ン タ ー		大 榮 薫	
環 境 ・ エ ネ ル ギ ー 工 学 セ ン タ ー	奥 山 勇 治		

資源環境化学分野 大島・大榮・稲田グループ

教授 大島 達也

2018年以降、筆者（大島）が環境応用化学科教授（2018年～）に、大榮先生が工学基礎教育センターの准教授（2019年～）として昇任し、さらに、当研究室卒業生の稲田先生が学科助教（2020年～）として採用され、学部内で組織をまたぐ3名体制での研究室となりました。2023年度は修士学生12名、卒論生8名が在籍し、間もなく研究室7年目を迎えます。

研究テーマのおよそ半分は、溶媒抽出・イオン交換を中心とした分離工学分野の課題です。近年のトピックの1つは塩酸系から金（Au(III)）等を回収する溶媒和抽出法と呼ばれる分離法です。この抽出法は迅速、大容量、高選択性に優れますが、学術研究があまり進んでいません。私たちは広範囲の抽出溶媒探索により、既存の溶媒より優れた候補化合物を複数見出しました。また、研究過程で導入した機械学習による溶媒探索は、溶媒抽出の分野では世界的にも先進的な取り組みです。大榮先生は従来からヒ素等の有害元素を除去する吸着剤を開発してきましたが、近年はイオン交換性の層状化合物を利用した吸着法を開発する

ほか、宮崎県内の環境保全に係る委員等を多数務めて地域に貢献しています。もう一つの主要研究テーマはペプチドを利用した材料開発で、稲田先生は着任後から金属有機構造体（MOF）の新規開発に着手して幾つかの新規化合物を見出し、それらはドラッグデリバリーシステムや生体適合材料など多様な応用が期待され注目を集めています。

コロナ禍では研究室の活動も大きく制限されていましたが、2023年度になって会食等にも制限がなくなり、従来の活動に戻ってきました。一方で、ライフワークバランスへの配慮が求められる時代となり、昔ながらの研究活動とは様相が変わってきました。適切な研究方針を立てて教員と学生間で円滑なコミュニケーションをとり、学生自身が自律的な活動により研究を発展させて、自身の能力を開花させるためには、教育法にもたゆまぬ改善が必要です。少子化・人材不足の状況で社会人を送り出す大学の役割は一層重要であり、鋭意努力して優れた研究成果と人材を社会に送り出したと考えています。



令和4年3月修了生・卒業生修論・卒論題目

<大学院>

氏名	論文題目	指導教員
大西 孝和	ピロリジニウム型イオン液体の輸送特性と溶液構造	湯井
具志堅 允	粘土ナノシート上に吸着したカチオン性ゲルマニウムポルフィリン錯体の光反応解析	白上
合谷 直敏	ヒドロキシオキシム系抽出剤を内包した疎水性クライオゲルの調製とCu(Ⅱ)の抽出特性	塩盛
白石 賢史朗	λ -MnO ₂ 造粒吸着剤によるLi(I)吸着回収プロセスの操作因子に関する研究	大島
茶木 優吏	軸グルコース連結ポルフィリン錯体のがん細胞に対する光線力学活性と作用機構の解明	松本
永野 乃暉	酵母菌を活用したアミノ軸配位子を有するリンポルフィリン錯体の光線力学活性評価	松本
中村 風太	チタンニオブ酸層状複合体のナノ構造と光刺激により誘起される巨視的形態変化	鍋谷
夏井 雄吾	リン脂質含浸ポリジビニルベンゼン多孔質微粒子によるアミノ酸のキラル認識吸着機構および残存ビニル基の化学修飾の影響	塩盛
三宅 晃太	塩酸系からのAu(Ⅲ)のイオン溶媒和抽出に適合する芳香族ケトンの開発	大島
吉川 綜	ナノセルロースの結晶表面特性に関する分子シミュレーション研究	湯井
吉川 公貴	有機リン酸系抽出剤を内包した架橋ゲルマイクロカプセルによる希土類金属イオンの抽出特性	塩盛

<学部>

氏名	論文題目	指導教員
今井 杜	<i>Clostridium beijerinckii</i> と <i>Pachysolen tannophilus</i> の混合培養による水素生産	横井・廣瀬
小松 歩夢	密度汎関数理論計算による糖質分子の立体化学研究	湯井
伊藤 章博	細孔表面にナイロン被覆を有する多孔質高分子マイクロカプセルの調製	塩盛・松根
稲吉 秀次朗	シュードモナス属細菌LLC-1株によるベンゾイルギ酸の分解特性	横井・廣瀬
井本 涼太	太陽光パネルの廃ガラスをモルタルの細骨材へ利用時に起こる化学反応の分析	塩盛・松根
岩田 裕生	発光性ナノシートと多フッ素化界面活性剤の複合体作製の検討	白上・鍋谷
岩本 成瑠	アミロース誘導体キラルセクターにおけるキラル認識	湯井
宇佐 卓訓	ビフェニル/PCB分解性細菌のサリチル酸分解経路による脱塩素化	横井・廣瀬
牛崎 そら	イソステアリン酸とTOPOによる深共晶溶媒の創出とSc(Ⅲ)の選択的分離および抽出平衡の定量的評価	菅本
榎木 拓哉	核発生と結晶成長の逐次プロセスを用いた高選択性銀ナノワイヤの合成	塩盛・松根
榎戸 雅基	ゲルマニウム-N-混乱ポルフィリン錯体の酸化還元特性	白上・鍋谷
大倉 颯太	酵素内包多孔質マイクロカプセルの調製方法の検討	横井・廣瀬
大場 朋大	粘土ナノシートに吸着したカチオン性スズポルフィリン錯体の光化学挙動と比較	白上・鍋谷
小倉 楓麻	モンゴル産羊毛フェルトを用いた重金属吸着剤の開発	塩盛・松根
小野 愛華	SPG膜を利用した製剤による β -クリプトキサンチンの高分散化と経口吸収性の評価	大島
折居 ひなた	染色体組込み型接合伝達因子ICEbph-salKF716の接合伝達効率に及ぼす影響	横井・廣瀬
甲斐 大晴	ジスルフィド結合からなる高分子粒子と環境応答性	塩盛・松根
小木野 知治	セメント修復剤を内包した環境応答性マイクロカプセルの開発	塩盛・松根
後藤 楓	テトラエチレングリコールを介してガラクトースを軸連結したP-ポルフィリン錯体の合成	松本
坂口 ななえ	アルキルピリジニウム型P-ポルフィリン錯体の大腸菌リン脂質複合リポソームとの親和性解析	松本

氏名	論 文 題 目	指導教員
坂下 大河	ヒュウガトウキの葉と茎に含まれるアングュラー型ピラノクマリン類の分析と合成	菅本
坂本 侑大	内水相にトレハロースを用いた高分子マイクロカプセルの調製と酵素固定化	塩盛・松根
佐々木 勇斗	<i>p</i> -置換フェニル基を持つリンポルフィリン錯体の還元電位に対する置換基効果	白上・鍋谷
篠田 瑞希	標的指向性と錯生成による可変的な薬物溶解性を備えた両親媒性ペプチドの開発	大島
城間 政輝	多フッ素化アルキルアゾベンゼン/ニオブ酸複合体が示す光運動におけるアルキル鎖の影響	白上・鍋谷
鈴木 耀介	ブルーベリー葉と茎に含まれる高重合度プロアントシアニジンの分析と可溶性の検討	菅本
田嶋 航	Cel7A糖結合性モジュールによるセルロース結晶面認識の自由エネルギー地形	湯井
田原 舞友花	トレハロースを過渡的マトリックスに用いたアルカリフォスファターゼ内包シリカ粒子の調製	塩盛・松根
坪井 奈都深	脂溶性リンポルフィリン固定化リポソームを反応場とする可視光増感酸化反応	松本
中井 朋香	超原子価ヨウ素触媒を用いた酸化を鍵反応とするカテコール型ジテルペン類の合成	菅本
永見 有理	水溶液中における α ヘリックスポリペプチド鎖の立体構造安定性	湯井
野崎 唯那	消化ペプチドとの複合化による β -クリプトキサンチンの分散性および経口吸収性の改善	大島
野村 圭佑	ゲルマニウム- <i>N</i> -混乱ポルフィリン錯体を増感剤とする一重項酸素生成反応	白上・鍋谷
橋詰 満衣	塩酸系からのGa(Ⅲ)、Se(Ⅳ)の抽出分離に適するイオン溶媒と抽出剤の開発	大島
瀧砂 幸人	窒素ガス吸着測定による光応答性チタン酸複合体のナノ構造評価	白上・鍋谷
樋口 詩織	S/Oエマルションを用いた仔魚の餌料用マイクロカプセルの開発	塩盛・松根
平井 友紀乃	軸グルコース連結リンポルフィリン錯体の合成と水素化による可視光吸収波長の長波長化	松本
古川 美紅	ヒドロキシ基を導入した架橋キトサンナノファイバーによるSb(Ⅲ)及びSe(Ⅳ) ₆ (Ⅵ)の吸着特性	大榮
堀江 慶太	含硫アミノ酸をインターカレーションしたMgAl層状複水酸化物による金の回収	大榮
本田 諒太郎	微生物由来エクスパンシンによる基質認識	湯井
牧浦 えみ	焼却灰培地での <i>Saccharomyces cerevisiae</i> によるバイオエタノール生産	横井・廣瀬
松原 聡	β -キチン結晶表面からの分子鎖剥離シミュレーション	湯井
森 竜馬	軸配位子にモルホリノ基を有するP-ポルフィリン錯体のpHによる光機能性制御	松本
八明 良弥	軸配位水酸基を持つ新規スズ- <i>N</i> -混乱ポルフィリン錯体の合成	白上・鍋谷
山口 亜美	アシネトバクター属細菌SF3株による油脂類の乳化および分解	横井・廣瀬
山口 滉太	酸化的エステル化を鍵反応とする光学活性なフィタン酸の合成	菅本
山田 祐斗	ペントース資化性酵母 <i>Pichia stipitis</i> の最適培養条件の検討	横井・廣瀬
山元 祐次郎	ピフェニル/PCB分解性細菌KF703株における芳香環メタ開裂酵素の誘導効果	横井・廣瀬
山元 優弥	日向夏由来アラビノガラクトンの酵素処理による分解生成物の検討	横井・廣瀬
湯川 麗々奈	新規アゾベンゼン含有多フッ素化界面活性剤/ニオブ酸複合体の作製と光応答挙動	白上・鍋谷
芳中 広奈	還元条件下で崩壊する高生体適合性金属有機構造体の開発と機能評価	大島
若林 謙	ナノスクロール構造を利用した金ナノ粒子集合体の作製	白上・鍋谷
吉井 昌哉	オキサアルキルピリジニウム基を有するP-ポルフィリン錯体による大腸菌可視光殺菌	松本
吉野 遼	表面にシリカ膜を有する多孔質高分子マイクロカプセルの開発と応用	塩盛・松根

令和 5 年 3 月修了生・卒業生修論・卒論題目

<大学院>

氏名	論 文 題 目	指導教員
井 達哉	<i>N</i> -アルキル置換ゲルマニウム- <i>N</i> -混乱ポルフィリン錯体の合成	白上
石橋 竜也	カリックス[4]アレーン誘導体への良溶媒探索と金属抽出特性に及ぼす影響の評価	大島
岩切 雄飛	塩酸系でのAu(III)の溶媒和抽出に適した抽出溶媒の機械学習探索	大島
江上 樹	オンデマンドで表面改質が可能な新規多孔性マイクロカプセルの調製	松根
川崎 敦史	シュドモナス属細菌のサリチル酸代謝酵素遺伝子群の転写制御に関する研究	廣瀬
北嶋 優	多フッ素化界面活性剤/ナノシート複合体における励起エネルギー緩和過程の解析	鍋谷
黒木 貴裕	逆ライデンフロスト効果を利用した粒子状クライオゲルの調製とリン脂質含浸によるアミノ酸のキラル吸着	塩盛
笹貫 一馬	配列にヒスチジン残基を含むトリペプチドを配位子とした金属有機構造体の開発	稲田
澤尾 綾音	難水溶性薬物へのキャリアとなる両親媒性テトラペプチドの構造最適化研究	大島
首藤 賢太郎	カチオン性ポルフィリン錯体を増感剤とする一重項酸素生成に対する粘土吸着効果	白上
瀬ノ口 ジュシュア	ゲルマニウム- <i>N</i> -混乱ポルフィリン錯体の光物性に対する金属イオンの添加効果	白上
十亀 侑矢	光学分割あるいは不斉反応を用いた光学活性なプリスタン酸の合成	菅本
高島 彩華	糖連結リンポルフィリン錯体の合成における軸配位置換反応の非対称化	松本
武元 佑樹	多糖類誘導体キラルセクターにおけるキラル認識	湯井
溜水 大和	水溶性成分を内包したタンパク質マイクロカプセルのリン脂質膜被覆による徐放制御	塩盛
寺田 敬斗	拡張アンサンブル法による β 1,3グルカン溶液構造の解析	湯井
野田 虎太郎	多糖類複合体結晶構造におけるリガンド分子の拡散挙動	湯井
野田 陽介	pH応答分子を添加した固体粒子内包マイクロカプセルの調製と放出制御	塩盛
濱内 莉子	<i>N</i> -ラウロイルサルコシンを基体とした深共晶溶媒の創出と白金族金属の選択的分離に関する基礎的研究	菅本
藤田 歩果	水溶化を目的としたエチレングリコール置換 <i>N</i> -混乱ポルフィリンの光機能性	松本
藤波 寛人	環境浄化に寄与するゲノミックアイランドの探索と機能解析	廣瀬
藤野 彩未	リンポルフィリン錯体への水素添加によるクロリン錯体の合成	松本
松本 茉李南	有機溶媒を用いない深共晶溶媒によるレアメタルの抽出特性とその抽出機構の解明	菅本
若松 寿紀	単分散銀ナノワイヤーの新規調製法の開発と反応機構の解明	松根

<学部>

氏名	論 文 題 目	指導教員
飯田 奈波	多フッ素化界面活性剤/タングステン酸複合体の作製	鍋谷
生島 優	アミン認識試薬としてのピラー[6]アレーン酢酸誘導体の新規合成と評価	大島
池田 浩大	テトラエチレングリコールを介してグルコースを連結したリンポルフィリン錯体の合成とその非対称化	松本
池水 廉	高塩濃度水溶液に均一に分散する中空シリカナノ粒子の調製	松根
一宮 大起	<i>p</i> -フェニル置換リンポルフィリン錯体による水の酸化反応に対する置換基効果	白上
岩切 一真	オリゴシルセスキオキサンと金属イオンからなる DDS 担体の分散性向上に関する検討	松根
岩切 里菜	ゲルマニウム- <i>N</i> -混乱ポルフィリン錯体を増感剤とするメタノールの光酸化反応	白上
上間 雄喜	ピフェニル分解性細菌 KF715 株の プラスミド pKF715A の接合伝達	廣瀬
岡田 裕介	S/O/Wエマルションからの液中乾燥法による糖アルコール内包マイクロカプセルの調製	塩盛
門川 雄大	地熱水からの Li(I)回収に向けた λ -MnO ₂ 造粒吸着剤における吸脱着条件の検討	大島
河野 晃大	カリックス[6]アレーン酢酸誘導体による 各種有機アミンの抽出特性	大島
北島 義士	茶葉に含まれるフラボノール・アミノ酸の定量分析	菅本

氏名	論 文 題 目	指導教員
木村 紫玲	ピフェニル/PCB分解性細菌の芳香族化合物代謝遺伝子の発現レベル解析の条件検討	廣瀬
久木山 遼樹	活性汚泥由来の芳香族化合物分解菌のスクリーニング	廣瀬
黒田 葉月	三価カチオン P-ポルフィリン錯体の大腸菌可視光殺菌に対するオキサアルキル基の効果	松本
古賀 咲也香	硫黄原子を含む試薬によるカドミウムの選択的除去およびパラジウムの選択的回収	菅本
小瀧 朋花	<i>Pyrococcus furiosus</i> 由来キチナーゼのキチン結合性モジュールによる基質認識	湯井
古谷 航大	グアニジル化 ε -ポリリシンの合成	井澤
佐藤 弘一	リンポルフィリン錯体の水素添加反応に及ぼす軸配位子および <i>meso</i> 位置置換基効果	松本
佐藤 未唯	シュードモナス属細菌の分岐サリチル酸分解経路の機能解析	廣瀬
神川 直也	Ferruginol から montbretol への変換	菅本
柴田 侃太	三級アミンを用いた新規銀ナノワイヤー調製における溶媒の効果	松根
末永 ひな乃	溶液中における α ヘリックスポリペプチド鎖の立体構造安定性	宇都
菅原 遼平	リン脂質含浸多孔質微粒子による L-トリプトファン の優先吸着に及ぼす L-リシンナイロン膜の影響	塩盛
杉井 秀彰	ヒュウガトウキ地上部に含まれる生体活性物質の分析と評価	菅本
須本 啓明	チオール-エン反応を利用した多孔性マイクロカプセルの表面アミノ化に関する研究	松根
芹川 武史	日向夏由来アラビノガラクトランの酵素処理に関する研究	宮武
竹田 ひかり	ゲルマニウム-N-混乱ポルフィリン錯体の一重項酸素生成における希土類金属カチオンによる増大効果	白上
立原 幸汰	<i>p</i> -置換フェニルゲルマニウム-N-混乱ポルフィリン錯体の酸化還元電位に対する置換基効果	白上
谷口 愛里沙	適度な融点の脂質を用いたクルクミン包括微粒子の開発と経口吸収性の評価	大島
友國 雅也	インジウム触媒を用いたグルコースのHMFへの変換	菅本
中居 聖貴	鶏冠からのコラーゲン-ヒアルロン酸複合体の抽出	井澤
中村 麻羽	<i>Trichoderma reesei</i> 由来セロビオヒドロラーゼの糖結合性モジュールによる基質認識	湯井
西田 龍矢	キレート化合物/ZnAl 層状複水酸化物複合体による重金属の吸着分離	大榮
西村 進之介	層状希土類水酸化物による有害金属イオンの吸着挙動と有機アニオンの包接特性	大榮
橋本 協	リン脂質を被膜したタンパク質マイクロカプセルの調製とその徐放抑制効果	塩盛
日高 直哉	疎水性クライオゲルの調製とリン脂質含浸による L-トリプトファン 吸着への応用	塩盛
平塚 真衣	ゲルマニウム-N-混乱ポルフィリン錯体と金属カチオンとの錯形成反応	白上
福田 真平	カードラン誘導体分子鎖の溶液構造	湯井
福吉 晃大	シュードモナス属細菌による各種芳香族カルボン酸の分解特性	廣瀬
星原 尚斗	ペプチドを配位子とした多孔性金属錯体の開発と薬物送達システムへの応用	稲田
前田 元	アルキル鎖を有するリンポルフィリン錯体を固定化したリボソームによる光増感酸化反応	松本
増田 裕斗	アミノ軸配位子を有するリンポルフィリン錯体の光殺菌活性に対する酵母液胞内 pH 依存性	松本
松本 涉吾	新規ニオブ酸ナノスクロールの作製と光運動の解析	鍋谷
宮本 大靖	ナノスクロール反応場で作製する金ナノ構造体の形態解析	鍋谷
本村 章	超短鎖ペプチドと金属イオンの錯体形成に基づくメタロ超分子ゲルの開発	稲田
森井 薫	アゾベンゼン/ナノシート複合体の作製と光運動誘起	鍋谷
吉田 幸代	光応答性層状複合体の光運動におけるアルキル鎖の影響	鍋谷
米倉 健太	アミロース誘導体キラル分離セクターによるキラル認識	湯井
天本 俊	天然セルロース結晶面からの分子鎖剥離による自由エネルギー変化	湯井

令和4年修了生・卒業生就職先一覧

<大学院>

():学生数

(株)東洋環境分析センター	三浦工業(株)	ソニーLSIデザイン(株)	JNC(株)
京セラ(株)	(株)アステックペイント	(株)高田工業所	富士紡ホールディングス(株)
伯東(株)	ダイハツ工業(株)	ILAC International College	

<学部>

三島光産(株)	(株)TFDコーポレーション	鈴与シンワート(株)	大栄産業(株)
SOMPOひまわり生命保険(株)	TOTOアクアテクノ(株)	アイテック(株)	ニプロ(株)
(株)NTTデータニューソン	(株)トスコ	タカラスタンダード(株)	久光製薬(株)
(株)アトル	(株)stara	(株)ヨシムラ	リファインホールディングス(株)
(株)興電社	丸東産業(株)	明陽電機(株)	関西酵素(株)
宇佐市役所	宮崎南高等学校(理科)	宮崎北高等学校(事務)	宮崎大学大学院工学研究科(27)
九州大学大学院	名古屋大学大学院	北海道大学大学院	

令和5年修了生・卒業生就職先一覧

<大学院>

():学生数

キオクシア(株)	協和キリン(株)	京セラ(株)	マイクロメモリジャパン(株)
藤倉コンポジット(株)	(株)アステックペイント	AJS(株)	住友ゴム(株)
日本タングステン(株)	東洋紡(株)	(株)アムコー・テクノロジー・ジャパン	(株)ジャパンセミコンダクター
クボタ環境エンジニアリング(株)	タカラベルモント(株)	日星電気(株)	千葉セラミックス(株)
(株)エスユーエス	旭有機材(株)	小林製薬(株)	JNC(株)
(株)高田工業所	東洋紡(株)	マイクロメモリジャパン(株)	(株)三徳

<学部>

(株)YKK	久光製薬(株)	(株)MJC	不二製油(株)
(株)宮崎銀行(2)	(株)オジックテクノロジーズ	富士フィルムワコーケミカル(株)(2)	(株)アドバンストシステムテクノロジー
霧島酒造(株)	ソニーセミコンダクタ(株)	ラピスセミコンダクタ宮崎(株)	栗田工業(株)
共同エンジニアリング(株)	宮崎県警	宮崎県庁	東広島市役所
宮崎大学大学院工学研究科(26)	宮崎大学大学院医学獣医学総合研究科	鹿児島大学大学院	鹿児島大学教職大学院
筑波大学大学院	大阪大学大学院工学研究科	九州大学大学院	



大学生活を通して

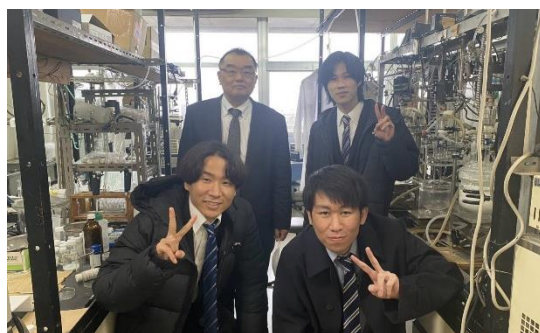
工学研究科工学専攻環境系コース2年 溜水 大和

宮崎大学に入学して6年が経ちましたが、入学した時の不安や興奮は昨日の事のように思い出せます。この6年間で様々な知識経験を得て、自分を成長させることができました。アルバイトでは激務の飲食店に勤めた事で労働の大変さを学ぶとともに、コミュニケーション能力を培うことができました。ここで社会の一端に触れ、働くことに対しての自信が身についたことで就職後もやっていけるような気がします。大学生活では友人と大学生らしく遊び、講義を受け、時には徹夜でテスト勉強するなど、充実した生活を送ることができました。彼らとの思い出は一生忘れないと思います。

学部4年から研究が始まり、それが思った以上に楽しく、もっとやってみたいという思いから大学院に進学しました。実験が上手いかず苦しい時もありましたが友人と助け合い、先輩にアドバイスを貰い、最後までやりきることができました。また、3年間お忙しい中、研究や就活など、多岐にわたって支えてくださった塩盛先生、松根先生には感謝しています。

私はずっと実家から大学に通っていたため両親にも大変お世話になりました。学費や食事など色々と負担をかけたにもかかわらず「6年間も追加で一緒に居てくれてむしろありがとう」と言われました。本当に頭が上がりません。

「とりあえず大学には入っておいたほうがいいよな」「とりあえず入学してからやりたいこと探すか」という控えめな意気込みから始まった大学生活でしたが、終わってみれば本当に大切な思い出となりました。これも、友人、先生、両親など人間関係に恵まれたおかげです。この感謝の気持ちを忘れずにこれから社会人としてがんばりたいと思います。



前列右側が筆者

大学生活で身につけたこと

工学部環境応用化学科4年 芹川 武史

私は初めての場所での1人暮らしに不安を抱きつつも、ずっと楽しみにしていた大学生活を充実したものになりたいという気持ちで宮崎大学に進学しました。進学してからの4年間、私は多くのことを経験し、身につけることができました。

大学一年生の時の学園祭でイベントの司会を経験しました。大学入学を機に高校時代までの消極的な自分から、積極的な自分にな

りたいと思い、自ら立候補しました。イベントの司会が決まったことでプレッシャーを大きく感じてしまい、特に私自身、人前に立つと緊張してしまい声が小さくなり、震えてしまっていたので、最初の練習では思い通りにはなりませんでした。このままではいけないと思い、同じ実行委員の友人を集めて大きな声を出す練習や、一から作った台本を先輩や友人に見せ、指摘してもらい、試行錯誤し

ながら納得のいくものに仕上げることができました。この練習が自信となり、本番ではアドリブも交えながら進行させることができ、イベントを盛り上げることができました。この今までに挑戦してこなかったことに積極的に取り組むという経験をして、私の行動を変えるきっかけになりました。



前列左側が筆者

また、4年生になり研究室に配属されてからは、1日中研究室にいたことが多くなりました。卒研のテーマに対して、初歩的な知識

しかなかった私は、実験装置の使い方やより専門的な知識を理解することにとっても苦勞しました。必要な知識を本や論文から取り入れ、そこから私の研究を進めるために仮説を立て、そこから得られる結果を想定しました。途中で、考えた仮説の間違いに気づき、また最初から考え直したり、多くの失敗を重ねました。しかし、私は研究室での研究を通して、自分で仮説を立て、検証するという考え方を身につけることができました。研究室内では1個上の先輩と2人でしたが、人数が少ない分、先輩や宮武助教とコミュニケーションを密に取りながら研究に打ち込むことができました。本当に感謝しています。

私は、4月から社会人になりますがこの大学生活で得られた、自分自身で考える力を新しい環境でも十分に発揮していきたいと思っています。大学生活も残り少ないですが、後悔のないように過ごしていきたいと思っています。



2023年度 在校生より

飛躍の3年間

工学研究科工学専攻環境系コース2年 牛崎 そら

私の大学生活、そして人生における大きな分岐点は研究室配属でした。学部時代はなんとなく就職を考えていましたが、「これなら誰にも負けない」と思える強みがなく、就職するイメージが湧かずに就職活動も思うように進められていませんでした。しかし、研究室配属をきっかけに研究や化学の面白さに惹かれて大学院に進学したことで、それまで見つかることのできなかった自身の「やりたいこと+強み」を見つけることができ、納得のいく就職活動ができたと感じています。

研究室では「深共晶溶媒」を用いたレアメタルや貴金属のリサイクル技術の開発」という研究テーマで約3年間取り組んできました。

このテーマを選んだのは、研究室見学の際に先生や先輩の研究紹介を聞いて面白そうだと感じたことがきっかけです。金属の分離回収のための新規抽出剤としての深共晶溶媒の利用は、研究例がほとんどありませんでした。その中で、金属に対する抽出特性や抽出メカニズムを解明し、従来よりも環境調和性の高い抽出剤を開発することを目標に日々研究を行ってきました。参考になる先行研究が少ない中で新たな抽出剤を創出し、評価することは難しく、何度実験をしても思うような結果が出ずに苦しい時もありました。しかし、実験を重ねる中で新しい発見や分からないことに対して「なぜ？」を追求していくこ

とが次第に楽しくなっていました。また、先生方や先輩方の温かいご指導の下で地道に検討した結果、金属抽出に対する深共晶溶媒の新たな効果と複雑な抽出メカニズムの解明に成功し、論文賞と学会発表において優秀賞を受賞することができました。

研究室で過ごした3年間はあっという間でしたが、私にとって大きく成長した3年間であり、分離技術の分野を学んでいきたいと思うきっかけにもなりました。このように学業や研究に打ち込むことができたのは、先生方や先輩・後輩、友人との出会いに恵まれていたこと、そして家族の支えがあったからだ

日々感じています。私は、4月から社会人になりますが、これまで支えてくれた方々に感謝の気持ちを忘れず、宮崎大学工学部の化学科で6年間学んできた知識と経験を糧にして頑張っていきたいと思っています。



後列右から3番目が筆者

私の大学生活

私が宮崎大学に入学した年は新型コロナウイルスの影響で入学式もなく、ほとんどの授業がオンラインでした。まだ入学したてだった私は人間関係やこれからの学生生活がとても不安で仕方なかったのを今でも鮮明に覚えています。その不安で仕方がない日々でたくさんの人との出会いや様々な経験から得られる学びがあり、4年間はあっという間に過ぎていきました。

大学生活全てを振り返ると、一番最初に頭に浮かぶのはサークル活動です。私は宮崎大学ダンス部 crew に所属していました。4年間のほとんどはダンスばかりしており、大学3年時には部長を務めました。部長になることが決まってからは自分にできるのかという不安に押しつぶされそうでしたが、部長になってからはそんなことを考える暇もなく、とても慌ただしくて忙しい毎日でした。部長として大人数をリードすることの難しさや、リーダーシップスキルの重要性を痛感しました。また、多くのメンバーや関係者とのコミュニケーションを深める機会を得ることができ、人間関係の構築や他者との協力関係を

工学部環境応用化学科4年 新地 友美

築く力を身につけることができました。辛いこともたくさんあった分それ以上に楽しいことばかりで crew に入ってよかったなと思いました。これも、サークルの先輩方、同期、後輩が支えてくださったおかげだと思います。また、サークルでの活動や交流が充実していることで大学生活全体がより充実したものになりました。

大学生活で学んだことや体験したことは、今後の人生においてもきっと役立つものだと思います。大学生活は、自分自身を知ることや向上するためのとても貴重な時間でした。私は4月から宮崎大学大学院に進学します。2年間という残りの大学生活で様々なことに挑戦し、常に感謝の気持ちを忘れずに後悔のない毎日を過ごしていきたいです。



前列右端が筆者

「博士課程を修了して就職した私の体験から伝えたいこと」

三菱ケミカル株式会社 田代 佳也 様



略歴：2010 年 工学部物質環境化学科 卒業、2012 年 工学研究科（物質環境化学専攻）、
2018 年 農学工学総合研究科（生物機能応用科学専攻）修了、2018 年より現職、林幸男研究室出身

令和 4 年 11 月 18 日(金)の秋時雨に晩秋の雰囲気漂う中、学部 3 年と修士 1 年の学生対象に進学・就職ガイダンス「教員と学生との懇談会」が開催された。卒業生による特別講演として、三菱ケミカル株式会社 田代 佳也様（物質環境化学科 2010 年卒）に標記演題でお話を頂いた。現在、同社福岡事業所 有機機能材料研究室でイオン交換樹脂の用途開発に従事なさっており、既存技術や製品を上手に活用することで新規事業を開拓する意義やアプローチの仕方を紹介された。また、当時の就職活動を通して、自身のなりたい将来像に悩んだ末に博士課程の進学を決意した経緯や、博士号の学位取得に至る過程で主

体的に取り組むことの大切さを学び取ったエピソードを述べた。就職がゴールではないことを強調し、5 年後・10 年後・20 年後先のキャリアプランを見据えて、学び続けることや考え続けることが必要であると語った。希望通りにならなかったとしても、回り道になっても良いから少しずつ自分のやりたいことに向けて、情報収集や進路決定していくべきだと伝える姿が印象深かった。「勉強」「コミュニケーション」「悩み」のキーワードを挙げて、課題・目標を達成するやり方を身に着けるために、試行錯誤を重ねてほしいと学生にエールを送った。

（文責：生物物質化学分野 宇都卓也）

「京セラ社員が語る大学卒業後の生活～宮大生だけに教える京セラ社員の話～」

京セラ株式会社 萬徳 聡史 様



略歴：略歴：2010 年 工学部物質環境化学科 卒業、
2012 年 工学研究科（物質環境化学専攻）修了、同年 京セラ株式会社 入社、酒井剛研究室 出身

令和 5 年 11 月 17 日(金)は秋晴れの爽やかな日に、毎年恒例の行事「教員と学生との懇談会」が開催された。進学・就職ガイダンスを目的として、京セラ株式会社 萬徳 聡史 様（物質環境化学科 2010 年卒）にご講演頂いた。現在、機械工具事業本部で、ファインセラミックスを生かした切削工具などの品質保障に関する業務に従事なさっており、製品の顧客満足度を向上させるだけでなく、品質

保障を追及することで製造コストを減らすことにつながる原因究明の取組みを紹介された。新製品の量産仕様立上げや海外出張での技術指導のご体験談を通して、京セラが挑戦性を重要視している社風であることについて強く印象に残った。さらに、就職活動のご体験談を交えて、企業研究のための情報収集や準備・対策についてのご助言を頂いた。ご自身の専攻である無機化学を活かした仕

事を選択や就職後のギャップや感じたこと、誰も解決していない挑戦的な仕事をしたときの充実感などを語った。人生のどんな時期であっても不安があり、その時々でどのように過ごすかが重要で、人との絆も大切にしてい

ほしいと結んだ。私事で恐縮ではあるが、筆者にとっては昨年度に続けて同級生の活躍する姿を知ることができ、日々の教育・研究活動により一層頑張らねばと励みになった。

(文責：生物物質化学分野 宇都卓也)

報告

2021、2022 年度卒業式

宮崎大学では、新型コロナウイルス感染症拡大を鑑み、昨年度までは学内で学科単位での学位授与式を実施してきましたが、2021年度からはシーガイアで卒業に伴う式典が開催されました。しかし、まだご家族の皆様のご参加はご遠慮していただき、卒業生と教職員のみで卒業式及び卒業懇談会が実施されました。卒業生の皆様は、これから社会へと

旅立って行かれますが、健康には十分気を付けて活躍してくれることを期待しております。何か困ったことがありましたら、大学の先生方に連絡をとってみてください。また、化学会の先輩方が周りにいるかもしれません。探して、相談してみるのもいいかもしれませんね。

2021 年度 卒業式学科集合写真
(令和 4 年 3 月 24 日 シーガイアコンベンションセンター)



2022 年度 卒業式学科集合写真
(令和 5 年 3 月 24 日 シーガイアコンベンションセンター)



～ 年次別所感 ～

化学47会第6回後記

満永利夫 (48 年卒)

化学47会は2019年10月の第5回以降コロナ禍で見送ってきましたが、2023年に入りコロナが収束傾向にあることや、後期高齢者への仲間入りも間近に控えたことで第6回を9月13日に開催する運びとなりました。

参加者は当初9人でしたが2人が体調や急用で会員参加は7人でした。奥さん同伴の参加が2人あり9名での会食となりました。会場はホテルメリージュ内の天津菜館マンガリンで18時から開催。今後の人生でやりたいことや目標などについてそれぞれ抱負を語り合い、女性も入って和やかな交流になりました。2次会はスナック・ハイヒールにて8名、みんなカラオケが上手でした。

尚、当日はゴルフ1組がハイビスカスで同窓生同志の気楽なプレイで楽しんできました。

翌日は数名で日南方面に向かい、サンメッセのモアイ像(イースター島からモアイ像復元協力へのお礼として贈られた)、運玉投げで知られる鶴戸神宮を訪ねて旧交を温めて散会となりました。

同窓生の訃報に関しては43年入学者30

人に限ると、卒業後の若い時期に4人、この数年で3人、合わせて7人の方が逝去されています。連絡先不明が5人ですので案内を出せるのは18人です。今後全員集合の案内は難しくなる感じですが、同窓生の健勝を期待したいと思います。先輩方の年度によっては80歳を超えても同窓会を定期的に開催されている学年もあり、可能な限り見習いたいとは思いますが、盛り上がり待ちたいと思います。同窓生に案内を出す立場からすると60歳以降の連絡先確認では無理があります。入学時点からの連絡網構築、在学中の同窓生宿泊交流会等の意識付けが大事なポイントのように思われます。今後の化学会活動に期待したいところです。



東京で長寿を祝い同窓会

原田繁利 (38 年卒)

昭和38年卒の仲間は、在学中から仲が良く卒業後、二年にごとに、各地で同窓会を開催、今回はコロナ騒動で中止していたので、四年ぶりに東京のプリンスホテルで開催しました。

集合のホテルロビーでは、開口一番、元気じゃったか。38年卒は83~84才の高齢者、それでも体調を整え、死亡、体調不良者を除き、(自称)健康は全員が出席でした。

夜の懇親会二時間は、様相ががらりとかわ

り、全員が健康維持の報告とそのノウハウの質疑応答の健康維持の学習会となりました。宴会を終わり、二人部屋の個室に分散した後も、あちこちの部屋をまわり、深夜まで歓談し、翌日はハトバスで都内観光をし、次の出会いを楽しみに東京駅で解散しました。

それにしても、健常者といっても83~84才高齢者。全員集う同窓会の魅力はなに???・・。教員をしていたので生徒の同窓会と比較して、卒業後60年以上も続く、同窓会の魅力

は?? 集まっても、よう元気だったか。近況のダベリングをして解散。それでも、卒業後60年以上続く、コミュニケーションの同窓会の魅力はなに???

定員 40 名、合格 28 名、入学したのが 23 名。ところが専門科目は実習も含めてすべて原書ときき、パラパラと退学者が続出して、結局残ったのは 18 名。特に天才、鈍才もおらず。入学時に購入の指示があったのが、下記原書・・・。ビックリ仰天、これにはこ

Analytical Chemistry	定性定量分析
QUALITATIVE ANALYSIS	P~630
QUANTITATIVE ANALYSIS	P~802
ELEMENTS OF PHYSICAL CHEMISTRY	物理化学
BY SAMUEL GLASTON	P~696
Unit Processes in Organic Synthesis	有機合成
P.H. CRIGGINS	P~1070
INTRODUCTION TO CHEMICAL ENGINEERING	化学工学
	P~753
以下、他の科もすべて英語、原書・・・省略・・・	

まりました。ところが、だれだったか覚えていませんが、「分担して、原書を翻訳しようや」で翻訳。だれかがさぼると、テスト問題も英

語、留年が待っているのです、全員必死でした。おかげで夏休以降は、全員辞書なしで読めるようになりました。この必死の取り組みで、飲み方の回数が増え、宴会、運動会では余興で剣舞等をやりました。

当時、宮大工業化学科卒は一桁。我々の時は 18 名で過去最多。どん栗の背比べのなんでも助け合った経験が、今も心の隅に生きている仲と、ジーンときた同窓会でした。みんな健康で、次の再会を期待して解散しました。



宮崎市の偉人「安井息軒」を もう一度見つめ直してみませんか

NPO 法人安井息軒顕彰会副理事長兼事務局長 黒木幸英(45 年卒)

安井息軒については、すでに化学会会報 No31(平成 29 年 12 月発行)で原田繁利副会長が「郷土が生んだ安井息軒先生の足跡に学ぶ」で述べられておりますが、その後の調査研究が進んでおりますので、令和 2 年～4 年度の 3 か年間、宮崎市安井息軒記念館の企画展の中から、「清武と飢肥の時代」「江戸の時代」「明治の時代」の 3 回シリーズで、「息軒の生きざま、すごさ」について会員の皆様方にご紹介したいと思います。

第 1 回目「清武と飢肥の時代の安井息軒」

○安井息軒誕生

・寛政 11 年(1799)1 月 1 日(旧暦) 飢

肥藩清武郷中野の安井滄洲の次男として誕生し、朝衡と名付けられました。父の名は滄洲、母は楚也、兄は朝淳、妹は美和と言います。

・滄洲は父(朝長)が若くして亡くなり(37 歳)でしたが、幼少のころから勉強が大好きで、江戸や京都に向いて学び、清武に帰って子弟に教えました。しかし、生活は貧しく、幼い兄弟も田畑の手伝いをしないと生活できない状況でした。

○猿が本を読む

息軒は父滄洲と同じように天然痘にかかり、顔はあばた顔で右目がつぶれ、背の低い、色黒でし

た。息軒は父のように学者になりたいと思い、田畑の往復時や休憩時も本を離すことはなく、村人の中には「猿が来た。猿が本を読む。」と陰口をたく人がいました。それでも向学心に燃え、家書も近所の本も読み尽くし、17歳からは近くの中山寺に籠って勉学に専念しました。

○大阪での苦学

息軒 22 歳の時、もっと勉強したくて、赤江の豪商から借金して大阪の朱子学の学者（篠崎小竹）に弟子入りして 3 年間学問に専念しました。食費を切り詰めるために醤油で煮しめた大豆ばかり食べていましたので息軒の名に因んで人々は「仲平豆」と呼ぶようになりました。（仲平は息軒の幼名で、息軒と呼ばれるようになったのは、70 歳になってからです。）

○江戸幕府の学問所「昌平校」に学ぶ

25 歳になった息軒は、大阪から帰ってから清武郷の子弟に教育していましたが、もっと勉強して「日本一の学者になる」という向学の気持ちを抑えることが出来ず、父に願ひ出て江戸にある昌平校に入校しました。昌平校では、書生があばたで背が低い息軒を馬鹿にし、軽蔑の目を向けるものもありましたが、黙って一人読書に没頭しました。その時、書生に対して作った歌が

「今は音（ね）を 忍ぶヶ岡のほととぎす いか雲井の よそに名乗らむ」

で、これを見た書生は息軒の意気込みを察し 軽蔑から畏敬の念となりました。

○明教堂創設、佐代夫人との結婚と青年教師

兄朝淳、母楚也が亡くなったのを契機に、息軒が帰国する頃、飢肥藩清武郷に新しい学校が竣工し、これに息軒が「明教堂」と命名し、父が教授を、息軒が助教授を務めました。

教師としての息軒を郷土史家若山甲蔵は『安井息軒先生』の中で「厳格なれども門人これに親うす

ること慈母の如し」と書いています。また、息軒は弟子の平部崎南や阿万豊蔵らを双石山に連れて行き、和歌や漢詩の指導をしています。

父は学者になった息軒を結婚させたいと考えました。息軒は当時 16 歳の「岡の小町」と呼ばれるほど美しい川添佐代と結婚します。佐代は後に森鷗外の短編小説「安井夫人」に描かれ、息軒と共に有名になりました。

○飢肥への移住と共に振徳堂で教鞭を振るう

清武郷校「明教堂」を知った飢肥藩主伊東祐相は、家老に命じて新しく藩校を創らせ「振徳堂」と命名、清武から安井親子を呼び、滄洲が初代総裁、息軒（32 歳）を助教にしました。

飢肥に着いた息軒はすぐに藩主から九州視察の命を受け「観風抄」としてまとめ提出します。34 歳の時には藩主祐相の侍読として江戸に上がりますが、外ノ浦の堤防建設問題など藩の上級武士たちとの対立を招くこともあり。滄洲は中風を患い、息軒に「剛直を慎むよう」遺言して亡くなります（69 歳）。息軒はこの遺言を生涯心に刻み、向学心をもって勉学に努めました。

○再び江戸へ

父の死後息軒は学問を深めるために江戸移住を希望し、江戸に出発します（36 歳）。江戸で息軒は昌平坂学問所の斉長や藩の外桜田邸の役職を務め、金地院で読書に専念しました。そのころ飢肥では二女が病気で亡くなるなど妻佐代が苦労していることから、一家を上げて江戸に移住したいと藩主に願い、許可されました（40 歳）。息軒の江戸での新しい時代の幕開けです。（次回は「江戸での安井息軒」です。ご期待ください。）

＊ 化学会会員の中で当顕彰会活動に協力できる方がおられましたら、小生までご一報ください。

（事務局長携帯 080-8589-0569）

よろしくお願いします。



..... あとがき

ここに会報 No. 36, 37（合併号）をお届けします。ご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。会報発行が遅くなり、また合併号になりましたこと誠に申し訳ございませんでした。

これからの会報の内容充実を図り読み易いものにするために何かお気づきの点がありましたら、化学会本部事務局までご連絡頂ければ幸いです。

最後に皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

令和 6 年 11 月 編集委員一同